

平成 22 年 5 月 20 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）  
 研究期間：2008～2009  
 課題番号：20820035  
 研究課題名（和文） 18 世紀後半における清朝とカザフ遊牧勢力の対外交渉に関する研究  
 研究課題名（英文） A study of the diplomatic negotiation between the Qing dynasty and the Kazakh nomads in the latter half of the 18th century  
 研究代表者  
 小沼 孝博（ONUMA TAKAHIRO）  
 学習院大学・東洋文化研究所・助教  
 研究者番号：30509378

## 研究成果の概要（和文）：

本研究では、18 世紀後半における清朝とカザフ遊牧勢力との対外交渉を、一次史料である文書史料の分析に基づいて研究した。特筆される成果として、清朝－カザフ関係に関する英文資料集の刊行がある。本資料集の主な目的は、カザフ首長層から清朝に送付された書簡を紹介し、その特徴と歴史史料としての価値を検討することであり、加えて清朝に派遣されたカザフ使節に関する基礎データも提示した。

## 研究成果の概要（英文）：

This research, on the basis of primary archival sources, studied the diplomatic negotiation between the Qing dynasty and the Kazakh nomads in the latter half of the 19th century. The important result is a publication of research paper in English on the relationship between the Qing dynasty and the Kazakh leaders. The main objective of this book is to introduce documents that were addressed from the Kazakh leaders to the Qing dynasty, and to examine their features and value as historical sources. In addition, it could provide the basic data on the Kazakh missions sent to the Qing court.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,330,000	399,000	1,729,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,530,000	759,000	3,289,000

研究分野：中央アジア近世史、新疆史、清朝の対中央アジア政策

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：清朝・カザフ・外交・中央アジア・文書

## 1. 研究開始当初の背景

|

満洲人皇帝を戴く清朝（1616-1912）は、18世紀中葉に天山山脈北部に拠点を置いた遊牧国家ジュンガルを打倒し、約70年にわたる抗争に終止符を打った。中央アジア全域に勢を張ったジュンガルの消滅と清朝の進出は、当地域に様々な形で政治的・社会的混乱をもたらしたが、それらを收拾し権力を確立していく過程で、清朝は中央アジアのテュルク系諸勢力と対外的な関係を構築していく。そして、それら諸勢力の中で清朝と最も密接な関係を築いたのが、北部草原地帯で清朝領域と直接境を接していたカザフ遊牧勢力である。

清朝とカザフとの関係については、従来さまざまな観点から論じられてきたが、清朝史の立場から論じる場合は、清朝が自らを「宗主」としてカザフを「藩属」に位置付けたこと、すなわち儒教的世界観にもとづく「宗藩関係」の存在を絶対的な前提として分析の枠組みが設定されている。したがって、そこで展開される議論は「宗藩関係」を維持する朝貢・冊封の実施状況の説明に終始し、両者間の関係の概念を根本から問い直そうという方向には向かわない。近年、清朝が「多民族国家」として支配下の諸集団をいかに支配・統合したかという問題が盛んに議論されているが、対外関係についても根本からの再検討が求められる。

一方、ソ連時代に確立したカザフ民族史（カザフスタン史）の立場では、中ソ対立の影響もあり、長らく清朝を侵略者と位置付ける傾向が強かった。ところが、1991年のソ連解体と中央アジア諸国の独立を契機に、清朝の対中央アジア政策を再評価する動きが現れ、清朝との関係強化がハン、スルタンと呼ばれたカザフの首長層の権力拡大に与えた影響などが組上に載るようになった。例えば、清朝皇帝の授与した爵位についても、従来は象徴的・名目的なものとして軽視されがちだったが、近年ではカザフ社会におけるその実質的な影響力が指摘されている。ただし、主にロシア語史料に依拠するこれらの研究は、清一カザフ間の実際の交渉過程を検討していないという弱点を持ち、また時期的にもロシアの影響力が強まり、清朝とカザフの関係が徐々に切断されていく19世紀前半が対象であり、そもそも両者がいかなる関係を構築していたのかという問題を解明しないまま「変容」のみが議論されている状況にあった。

これに対して本研究課題の研究代表者である小沼は、18世紀中葉における清朝のジュンガル征服を研究する中で、清とカザフの対外交渉を支えた満洲語・オイラト語（トド文字モンゴル語）・テュルク語（アラビア文字東トルコ語）文書の存在を知るに至った。そしてその解読と分析から、清側・カザフ側がともに、清朝皇帝を“ejen”（モンゴル語

の「主人」）、カザフをその“albatu”（モンゴル語で「属民」）になぞらえて交渉を行っており、両者の関係がモンゴルの支配関係を基本に成立していたことを明らかにした。他方、清朝皇帝が国内向けに発した漢文上諭では、一転して中国・儒教的な「宗藩関係」の存在が強調され、モンゴルの支配関係は感知できないようになっていた。すなわち、清朝政権は言語を巧みに使い分けることによって、カザフとの間に構築した関係を漢字・儒教文化圏に属する人々に対しても合理的に説明していたのである。

本研究課題は、以上のような背景をもとに、より実証的に清朝とカザフ遊牧勢力の関係を明らかにすべく実施したものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、18世紀後半における満洲人王朝の清朝と中央アジアのカザフ遊牧勢力との対外交渉を、清朝の公文書である満洲語文書、カザフ首長層が清朝に宛てたオイラト語・テュルク語文書等の分析にもとづいて検討し、中央アジア北部草原地帯における清朝の政治権力の拡大・浸透過程と、それがカザフ遊牧社会に与えた影響を具体的に明らかにすることにある。具体的には、以下の三つを課題として設定する。

### (1) 関係構築の具体的な過程の解明

清朝とカザフとの関係は、1757年のカザフ中ジュズのアブライの帰順を端緒とする。本研究ではアブライの宿営に赴き帰順工作にあたった満洲旗人ヌサン（努三）の活動に注目する。主な史料は、満洲語で書かれたヌサンの報告書二通と、アブライが提出したカザフを構成する各部族集団・有力者の名前や属民の人数を記したリストである。これによって、清一カザフ間の関係構築がどのような手続きで進められたのか、またその際にいかなることが問題視されたのかを明らかにする。

### (2) カザフ使臣の人員構成の復元

アブライの帰順以降、他のカザフ首長層も続々と清朝に「遣使進貢」するようになり、清朝側において次第に受入のための諸規定が定められていった。従来の研究では、このうち「進貢」（貢物の献上、いわゆる朝貢）に主な関心が注がれてきたが、本研究では「遣使」（使臣の派遣）に光をあてる。まず北京に到来したカザフ使臣の人員構成を復元し、各使臣の出自・身分をロシア史料とも対照させながら確定する。次にそのデータの分析から「遣使」の時代別・集団別の特徴を把握して、18世紀後半における清一カザフ関係の大局的な推移を明らかにする。なお、使

臣の中には清朝皇帝から爵位を授与された者が存在する。のちに彼らがカザフ社会どのような地位を獲得したのかを追うことにより、清朝権力のカザフ社会における影響力の大きさを探る。

### (3) カザフ来文の文書学的研究

中国第一歴史档案馆には、カザフの首長層が清朝に送付したオイラト語・テュルク語書簡（来文）の原本が所蔵されている。本研究では、これら書簡の調査・収集を継続的に行う、訳注作業（英語）を順次進めて歴史学研究に利用し得るテキストを提示する。また、清朝からカザフに送付された書簡（行文）についても本格的な調査を開始する。

## 3. 研究の方法

本研究の研究方法の基本は、海外の文書館における史料調査とその分析である。そしてその成果にもとづいて、清朝がカザフ遊牧勢力といかなる関係を構築したのか、またはカザフ社会にいかなる影響を及ぼしたのかを解明する。なお、本研究は清朝史の立場からのアプローチを主とする。カザフに限らず、清朝と中央アジアのトルコ系諸勢力との関係を検討し、その歴史的意義を考えるためには、双方が残した史料を利用する必要があるが、高度に組織化された行政機構を備える清朝政権が残した史料の量は、遊牧生活を営むカザフ人のそれを圧倒している。本研究で利用するカザフ側の史料というのも、前述のように、北京に送付され保管されることになった書簡類である。清朝史の立場をとるのは、かかる理由によるものである。

本研究の鍵となるのは、中国第一歴史档案馆に所蔵され、「軍機処全宗」に分類されている文書史料群（以下、軍機処文書）である。1729年頃に設置された軍機処は、当初は辺境の軍務を掌る臨時機関であったが、その後皇帝の諮問府として国政を審議する最高機関となり、同時に文書行政の中核として公文書を複写・保管するようになった。この複写・保管された公文書が軍機処文書である。18世紀後半のカザフ関連史料はこのカテゴリーに含まれ、かつその大半は清朝の「国語」たる満洲語で記されている。近年、中国第一歴史档案馆とカザフスタン東洋学研究所が、前者所蔵のカザフ関連史料の共同出版事業を開始し、既に1754-64年の526件の影印文書を収めた2冊の資料集『清代中哈関係档案彙編』（一）・（二）（北京：中国档案出版社、2006・2007、全5冊が刊行予定）が刊行されている。アブライがヌサンに提出したカザフ各部族集団・有力者の名前や属民の人数を記したリスト等、本研究に関連する文書が

複数含まれており、こちらからも情報の抽出を行う。

軍機処文書からは、漢文編纂史料では省略されている詳しい事件の処理過程や政策の決定過程を知ることができる。ただし、編纂史料・文書史料あるいは漢文・満文という違いはあれ、清朝政権側の強いバイアスが加えられていることにはかわりない。したがって、清-カザフ間の交渉過程やカザフ社会の内情を探るためには、彼ら自身が書き残した史料の利用が不可欠となる。18世紀後半においては、カザフ人自身の手による年代記の如き文献は存在しないが、軍機処文書のうち「軍機処満文録副奏摺」と総称される史料群中には、前述のようなカザフの首長層が清朝に送付したオイラト語やテュルク語の書簡が現存し、清朝の翻訳作業によって潤色される以前の彼らの見解を窺知することができる。

上記のカザフの首長層の書簡は、貴重な内容を含むものの、断片的であるという弱点を持つ。そこで本研究では、清朝史料を批判的に読み込んでいくため、ロシア語史料についても随時参照し、情報を補っていく。

## 4. 研究成果

以上のような研究の目的・方法にもとづき、研究代表者の小沼は以下のような調査・研究作業を行った。

第一に、北京市の中国第一歴史档案馆および台北市の故宮博物院図書文献館・中央研究院歴史語言研究所における文書資料の調査である。この調査により、カザフの首長層が清朝に送付したオイラト語やテュルク語の書簡と、それに関連する満文・漢文史料を収集した。

第二に、以上のような調査を通じて収集した、18世紀後半における清朝-カザフ関係の実態に関する史料の読解・分析を進めた。収集したオイラト語・テュルク語文書については、アラビア文字テキストとローマ字転写テキストを作成した。また「満文哈薩克档」中の「哈薩克名冊：乾隆年間」の分析から、清代に北京に派遣されたカザフ使節の回数・年次・派遣者・使臣の人員構成を復元し、研究上の根本的データを蓄積することができた。

第三に研究成果の公開である。研究代表者は、研究期間中に、本研究課題に隣接する内容も含めて、学会発表5件（国内4件、国外1件）を行い、学術論文6件（日本語2件、中国語1件、英語3件）を公表し、また図書1件（共著、英語、非売品）を刊行した。特に、本研究課題の申請時に目標として設定していた、清朝-カザフ関係に関する英文資料集（野田仁氏との共著）を刊行することができた。本書の第

一章には、海外調査によって収集したものを  
含む、カザフ首長層が清朝に宛てたオイラト  
語・テュルク語文書 16 件を収録した。各文  
書のアラビア文字テキスト（テュルク語文書  
のみ）、ローマ字転写テキスト、訳文、註釈  
を提示し、また関連する満文・漢文文書のテ  
キスト・訳文も加えた。第二章は小沼の英文  
論文、第三章は野田氏の英文論文を掲載した。  
第四章では、「満文哈薩克档」を利用して、  
カザフ首長層が清朝宮廷（北京・承德）に派  
遣した使節団の回数・年次・派遣者・人員構  
成に関する論考を収録した。今後、当該分野  
を研究する上で、まず参照される著作を刊行  
できたと考える。

そのほか、研究期間内には公表できなかつ  
たが、1770 年代におけるカザフ草原南辺にお  
ける政治情勢が清朝の対中央アジア政策、新  
疆統治政策に与えた影響を検討した学術論  
文を執筆した（投稿中）。また、満洲旗人ヌ  
サンの遣使報告書二通についても翻訳を完  
了しており、それにもとづく学術論文の執筆  
を予定している。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に  
は下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

小沼孝博 「“控噶爾国”小考—18-19 世紀欧  
亜東部奥斯曼朝認識之一端—」〔中国語〕、  
中央民族大学歴史系主弁『民族史研究』第  
8 輯、北京：民族出版社、153～163 頁、2008  
年 9 月。

小沼孝博 「ジューンガルの支配体制に関する  
基礎的検討」、窪田順平・承志・井上充幸  
編『イリ河流域歴史地理論集—ユーラシア  
深奥部からの眺め—』、京都：松香堂、33  
～63 頁、2009 年 3 月。

小沼孝博 「消えゆく北京のムスリム・コミュ  
ニティ—トルコ系ムスリム居住区「回子  
営」の二五〇年」、堀池信夫編『中国のイ  
スラーム思想と文化』（アジア遊学 129）、  
東京：勉誠出版、176～189 頁、2009 年 12  
月。

Onuma Takahiro. “Political Relations  
between the Qing Dynasty and Kazakh  
Nomads in the Mid-18<sup>th</sup> Century: Promotion  
of the ‘*ejen-albatu* relationship’ in  
Central Asia.” In Noda Jin and Onuma  
Takahiro, *A Collection of Documents from  
the Kazakh Sultans to the Qing Dynasty*,  
Joint Usage / Research Center for

Islamic Area Studies, *Central Eurasian  
Research Series*, Special Issue 1, pp.  
86-125. Tokyo: Department of Islamic  
Area Studies, Center for Evolving  
Humanities, Graduate School of  
Humanities and Sociology, the  
University of Tokyo, 2010. 3.

Onuma Takahiro. “Kazakh Missions to the  
Qing Court.” In Noda Jin and Onuma  
Takahiro, *A Collection of Documents from  
the Kazakh Sultans to the Qing Dynasty*,  
Joint Usage / Research Center for  
Islamic Area Studies, *Central Eurasian  
Research Series*, Special Issue 1, pp.  
151-159. Tokyo: Department of Islamic  
Area Studies, Center for Evolving  
Humanities, Graduate School of  
Humanities and Sociology, the  
University of Tokyo, 2010. 3.

Onuma Takahiro. “A Set of Chaghatay and  
Manchu Documents drafted by a Kashgar  
Hakim Beg in 1801: Basic Study of  
“Chaghatay-Turkic Administrative  
Docu- ment”.” In James A. Millward,  
Shinmen Yasushi, and Sugawara Jun (Eds.),  
*Studies on Xinjiang Historical Sources  
in 17-20th Centuries* (Toyo Bunko  
Research Library 12), pp. 185-217,  
Tokyo: The Toyo Bunko. 2010. 3.

〔学会発表〕（計 5 件）

小沼孝博 「エミン=ホージャの台頭と周辺勢  
力：18 世紀中葉のトルファン情勢」、地域研  
究コンソーシアム「次世代研究者ワークシ  
ョップ」企画、「地域秩序の形成と流動化—  
中央アジアの“いま”を探る—」、学習院大  
学創立百周年記念会館小講堂、2009 年 1 月  
31 日。

小沼孝博 「北京のトルコ系ムスリム居住区  
「回子営」の 250 年」、第 14 回中央ユーラ  
シア研究会、東京大学本郷キャンパス法文 1  
号館 217 教室、2009 年 2 月 21 日。

ONUMA Takahiro. “The Zhunghar Empire’ s  
Development and the Bukharan  
Merchants.” In the 2nd International  
Symposium on Trade and Merchants along  
the Silk Road, Seoul: Institute of  
Central Eurasian Studies at Seoul  
National University, 2009 年 6 月 13 日。

小沼孝博「ジューンガルの発展とオアシス定  
住民—いわゆる「ブハーラ人」の役割を中  
心に—」, 総合地球環境学研究所プロジェ  
クト 4-5「民族/国家の交錯と生業変化を  
軸とした環境史の解明—中央ユーラシア  
半乾燥域の変遷」講演会, 総合地球環境学  
研究所セミナー室 3・4, 2009年10月10日.

野田仁・小沼孝博「カザフの清朝宛文書に関  
する基礎的研究: *A collection of  
documents from Kazakh sultans to the  
Qing dynasty* の編纂と共同研究」, 共同利  
用・共同研究拠点イスラーム地域研究東京  
大学拠点「人文学及び社会科学における共  
同研究拠点の整備の推進事業」研究会, 東  
京大学本郷キャンパス法文1号館217教室,  
2010年2月13日.

[図書] (計1件)

Noda Jin and Onuma Takahiro. *A Collection  
of Documents from the Kazakh Sultans to  
the Qing Dynasty*. Joint Usage / Research  
Center for Islamic Area Studies, *Central  
Eurasian Research Series*, Special Issue  
1. Tokyo: Department of Islamic Area  
Studies, Center for Evolving Humanities,  
Graduate School of Humanities and  
Sociology, the University of Tokyo, 182p,  
2010. 3.

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

なし

○取得状況 (計 件)

なし

[その他]

ホームページ等

なし